対談＝愛する百姓のあれこれを語る

日曜のある百姓に——

三宮 末政 ほしい農政への関心

二町余りの水田に稲とタバコを耕作し、昨年（四十一年度）政府へ出荷した予約米の量が、二百俵を越して表彰されました田村の末政さんと、ハウス園芸と稲作を主体に農業経営をしながら、農政への関心をもつ三宮さんのお二人にお出でを願って、百姓のおかれているいろいろのことがらについて語ってもらいました。

末政 昨年から県の奨励品種となった「フジミノリ」は、七～八年前に日章の農研会長が東北の視察から持ち帰えったもので、日章の七割を占めている。つづいて多いのは豊年早生である。ことしの刈り取り時期は四、五日早かったようである。

三宮 刈り取りの早かった原因は四月二十日前後の植付から、晴天がつづき、日照時間の長かったことで始めは一週間余り早い見込みであったが、出穂期に降雨量が多く、当初の見込みよりややおそくなった。

末政 最近はイネの品種はもとより営農指導もよくなり、とくに空中防除は効果的である。

消毒は米を増収するために大切なもので、出穂前に二回の紋枯れ、一回のイモチ病、また、穂ぞろい期に二回のイモチ病の防除は最少限としてやるべきである。

とくに紋枯れについては発生していないと思っても消毒をしておくべきである。

ことしの作柄は昨年と大差はなく、反当七俵から十一俵ぐらいであろう。

自分は二町三反耕作しているが、タバコを七反～八反、早稲を一町六～七反耕作している。昨年は平均九俵半であったが、ことしは平均して九俵ぐらいでないかと思っている。平均十俵ということはなかなかむつかしいものだ。

三宮 早やく播き、早やく植えたものは昨年と同様によく、早やい方が実ばりがよいようだ。

＝日本で反当収量の多い県は

末政 高知県はむかし四～五俵といったところであった。県全体の平均で一番多いのは佐賀県の九俵半で、多収獲における反当収量での現在の最高記録は二十一俵というのがある。

三宮 寒冷地の北と、南の西南暖地とをくらべてみるに、むかしは北の方が多かった。しかし南は裏作など土地の利用により収益をあげていた。一方寒冷地では冷害にかかる年もあり、小作人が多く、悲惨な生活をしており、寒冷地に対する農政が二、二六事件の背景となったものである。

農薬と機械で 余剰労力の活用

そのためそれ以後は、寒冷地帯に対して国の農業施策の重点が置かれている。

末政 むかしとくらべてこのごろの水稲栽培は大幅に省力化され、人手がかからなくなった。草取りはバンコンなどの除草剤を使うことにより草取りをする必要はなくなった。もし草取りをしてもタチを一回機械で取るだけでことが足り、病虫害の防除と、ヒエ引きだけでよく、人役はほとんどかからなくなった。米だけでは食えないので、くすりと機械で省力化することによって、その余剰労力の活用が考えられ、タバコ、園芸などの換金作物にむけられてきている。

余剰労力をタバコへ向けたが、稲作のみのときの方が楽だった。しかし園芸よりも楽だろう。

タバコは労力がいる割に収益は少ない。

二番稲は土佐二号とタマヒメモチは収量が安定していてよいと思う。

＝稲作と園芸、タバコのバランスは

末政 労働力により違いはあるが一町であれば、米八反、ハウス二反といったところがバランスのとれた耕作ではなかろうか。タバコ、ハウス、米の三つは、なかなかつくれない。

ハウスには危険性があるが、一反百五十万円の収益はある。タバコと園芸の違いは、加温一反とタバコ二町の割合いになるだろう。

三宮 ハウス一反の経費は初年度は百七十万円はかかり、純益はあがらないが、ハウスの資材は五～六年は使えるので、二年目からは油、ビニール、肥料などの経費のみでよく、利益のあがるのは二年目以降になる。

三宮 むかしの百姓は一町耕作すれば生活できた。しかしいまでは三町耕作しなければ生活できない。だから毎年のように米価運動をやかましくすすめているのだ。

評論家などにいわすと、米は高いというが、米だけでは食ってゆくだけのことで、生活はできない。せめて給与所得者なみの生活をさしてもらいたいというのが百姓のいい分である。

末政 米作だけの農家は減っている。むかしもやりにくかったが人役が安かったし、米が物価の基準であった。しかしいまは貨幣に基準を含されているので、むかしとは比較できない。

現在叫ばれている米一俵八千五百円は二十年前にすでに実現していた。これは当時の嘆み値ではあるが、当時の強制供出の代金は米一俵代で、ジャコ一袋の代金であった。決して一俵八千五百円は高いものではない。米価もことしなみのようにあがるべきである。

対談＝愛する百姓のあれこれを語る

愛する百姓の

給与所得者なみの生活水準を

語る人 末政清海さん（田村）

三宮 いままで極端に米の値段が高いときは、戦後のインフレのときで、決して政府の政策がよくて百姓がよくなったためしはなく、無政府状態に近いときのみである。

現在の国の農政は、寒冷地主義になっている。西南暖地に眼をむけるような突き上げが大切だ。

英国は、肥料代に半額を国が出している。日本では逆に輸出の肥料代よりも高い値段で買わされている。

＝農薬は体に影響がありはしないか

三宮 農薬による人体に対する被害はホリドールなどを使用しない現在あまりないようだ。しかしその影響はいつかでてくるのではなかろうか不安であるが、生活のためには体をはってやっている。

男性より女性の方に農夫症が多いのは、男性は半農半工が多いためであると思われる。

むかし都会病といわれた脚気は都会になく、脚気の症状のものが百姓に多い。また、秋田と方ではその実現はむつかしいと思う。

すまいの協同化にしてもプライベートのこともあり問題点がある。

三宮 耕作地の住宅化にともない耕作地を確保するため住宅について根本的に考えなければならない時期がくる。そのためにもすまいの協同化は考えなくてはならないではなかろうか。

末政 これからの百姓は、年中働きづくめではなく、早生秋などを除いては日曜、土曜のある百姓をしなければいけないし代日休暇も考えてゆくべきだ。それが後継者づくりの手段でもある。働くときに働き、遊ぶときには家族全体で遊ぶことだ。

三宮 田村西部は一町以上の耕作農家にはすべて後継者がいる。

後継者づくりは部落全体で

高知はガンが多い。ビタミンB₂の補足が必要で、米と麦のバランスが大切だ。

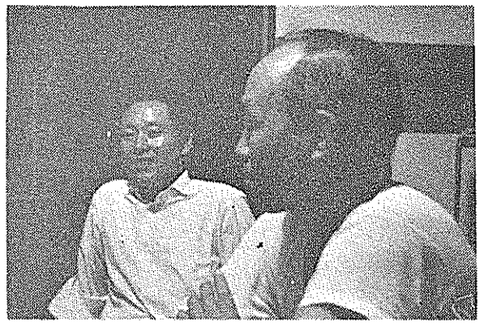
＝これからの農業は

三宮 農家は日当りのよい座敷を平常使用していないが、これは非健康的なことだ。すまいの協同化といった面で農家のアパート方式が考えられる（実際アパートをつくっているところがある）そこから協業化への呼びかけをすれば、必らず出資、労働力での配当性になる時期がくると思う。

末政 協同化、協業化の利点は判っていても、いまの百姓の考え親の指導もよいだろうが、模範的な部落である。

若いものは友だちがいなくなるとよそへゆきだすので、部落全体が歩調を合せて考えてゆかなければ、うまくいかない。

これからの百姓は技術面だけでなく、農政面へも眼をむけるべきだ。農協も米価運動のみでなく全般的に指導をすべきである。農業の生産が七十割を割ると、独立国としての体面は保たれないので、農政へ力を入れらすべきだ。



（語る末政さん（左）と三宮さん（右））

無料 法律人権・行政相談

毎月20日10時から15時 中町公民館

人権擁護委員 田村入交照

上野田 高橋長敬

瓶岩 島本直治

前浜 浜田称芳

行政相談員

下末松 山崎喜一

里改田 竹内英喜

あれこれを語る

三宮 寛さん（田村）